The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ヤジュルヴェーダ・サンヒターのブラーフマナの記述を中心とするヴァージャペーヤ祭の研究
Author(s)	池田, 宣幸
Citation	大阪大学, 2013, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/60049
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【5】

氏　　名	池　田　宣　幸（いけだ　のぶ　ゆき）
博士の専攻分野の名称	博　士（文学）
学　位　記　番　号	第　２６０４８　号
学位授与年月日	平成 25 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当 文学研究科文化形態論専攻
学　位　論　文　名	**ヤジュルヴェーダ・サンヒターのブラーフマナの記述を中心とするヴァージャペーヤ祭の研究**
論　文　審　査　委　員	（主査） 講　師　堂山英次郎 （副査） 教　授　榎本　文雄　　教　授　福永　伸哉

論　文　内　容　の　要　旨

本論文は，古代インドのヴェーダ祭式の一つである大規模複合祭式，ヴァージャペーヤ祭を対象とし，それを伝える祭式諸文献の読解に基づき，誰が祭主（祭式の主催者）として何のために同祭式を行なっていたのかという根本的かつ未解明の問題に取り組んだものである。具体的には，ヤジュルヴェーダ学派の主要５派のブラーフマナ文献（祭式に用いる祝詞や儀礼の神学的解釈を収録）の中から，ヴァージャペーヤ祭の神話的因縁譚，及びその中で儀礼として行われる戦車競走を取り上げ，それらの文献学的解釈に基づき，往時の祭官階級と王族階級との関係を考察した研究である。

１章での簡単な導入の後，２章ではヴァージャペーヤ本祭の中核的儀礼である「戦車競走」，「祭柱儀礼」，「灌頂儀礼」，「動物犠牲祭」の各式次第を下位項目に分けて概観している。各項目では，使用されるマントラ（祝詞）と，後代に成立した祭式実行マニュアルであるシュラウタスートラの対応箇所が全て提示され，当祭式に関するヴェーダ文献全ての対応表の役割をも兼ねる。本論で詳しく扱われる戦車競走以外の儀礼には簡単な解説が付され，全体の式次第の流れがつかめるようになっている。本論にあたる３・４章のうち３章は，各文献のヴァージャペーヤ章冒頭に見られる同祭式の起源や全般的な議論を扱う。即ち，かつて神々がこの祭式を巡って戦車競走を行なった時，ブリハスパティ（祭官［階級］の象徴）が同祭式を勝ち取り，それをインドラ（王族［階級］の象徴）が／も主催したという神話的因縁譚に始まる諸議論である。それに応じて，全ての文献でこの祭式は祭官（階級）も王族（階級）も主催できるとされているが，神話における両神の同祭式への関わり方は文献間でも異なり，またいずれの文献もそれにより得られる効果には王権に関わる概念を挙げているなど，誰が何のために行う祭式かについては統一的理解を許さない。本章ではこれらの諸問題が，学派による記述の違いとともに整理されている。４章は，因縁譚に対応して祭式の中で行われる戦車競走儀礼を「戦車準備」，「戦車準備にひき続いて行われる競走前の諸儀礼」，「競走～競走後の諸儀礼」の３つに分けて，それぞれの構成儀礼を詳しく検討している。３章と同様，各学派のマントラ引用及び祭式解釈の違いがテキストの緻密な読みに基づいて検証されるが，その際ブラーフマナの解釈だけではなく，引用されるマントラ自体の理解をも積極的に論拠に用いるところが本章の特徴と言える。その結果，学派によっては，神話の再現と考えられる戦車競走儀礼であるにも関わらず，祭主は神話で勝利したブリハスパティではなく，競走に参加していないインドラになぞらえられているということが指摘されている。また『シャタパタ・ブラーフマナ』（ŚB）では，冒頭の神話でブリハスパティとインドラがそれぞれ祭式を行ない支配者となったことに対応して，祭官が戦車の車輪に登る儀礼と太鼓を叩く儀礼でも，祭主が祭官（階級）か王族（階級）かにより別々のマントラを使うよう規定していることも明らかにされた。５章では，３・４章で得られた結論が再度まとめられている。論文の最後には，使用した５文献の全テキスト及び日本語訳が付されており，脚注ではテキストの読みや語義等に関して必要十分な注釈が付けられている。

論　文　審　査　の　結　果　の　要　旨

ヴェーダ祭式の中でも，ヴァージャペーヤ祭は殆ど研究の進んでいない分野の一つである。しかも先行研究の殆どが後代のシュラウタスートラに基づく式次第の研究に留まり，マントラやブラーフマナの翻訳研究でさえ皆無に等しい。こうした状況下で，池田氏が同祭式のブラーフマナ部分を全訳したこと自体極めて意義深い成果であるし，更には，それに基づいて思想的・社会的背景の解明を目指したことは，祭式文献が単なる祭式研究を超えた貢献をなし得ることを見事に証明している。無論，難解で膨大な祭式文献を正しく読解出来るためには長年の訓練による知識の蓄積に加えて，難解なヴェーダ語を正しく読みこなすための特別な能力と根気が必要となるが，池田氏がこれら全てを兼ね備えていることは本論文の各所から容易に了解される。

本論文の構成には論者の関心や視点が分かり易く現れている。論旨・論理は簡潔・明快であり，主張や結論は常に慎重で，余計な言葉や憶測をなるべく排した記述からなる。２章はヴァージャペーヤ祭の主要部を概観するための簡潔なハンドブックであり，本論文の理解のみならず，当祭式研究のための貴重な参照資料として有用である。本論文の中核となる３・４章で議論されるのは，祭式全体から見れば限られたテーマではあるが，その議論が，ヴェーダ全学派に亘るサンヒター，ブ

ラーフマナ，シュラウタスートラの全並行箇所の読解の上に成り立っていることは明白である。読んだもの全てを提示して無駄に紙面を費やすことを避け，最も象徴的で重要な祭式要素に絞って議論を展開しているのは，これほど大規模な複合祭式の研究としては妥当な方法論と言える。そして池田氏がこの祭式の本質的要素として神話的因縁譚と戦車競走儀礼とを中心的に取り上げたことは，全テキストを読了した人間ならではの卓見であろう。即ち冒頭の神話は，ヴァージャペーヤ祭は誰が何のために行う祭式なのかについて最も多くの情報を与え，それが，神話の再現たる戦車競走儀礼の中によく現れているからである。ただしこの祭式が誰に帰属するのかについて各学派は，それをブリハスパティ（祭官階級）・インドラ（王族階級）の一方ではなく，いずれのものでもあるということを，それぞれ異なる方法で理論付けているように見える。例えば，池田氏が正しく指摘するように，『タイッティリーヤ・ブラーフマナ』は，ブリハスパティに粥を捧げる時には，祭主を「神格に関してはブリハスパティに属する」と言い，戦車競走の時には「祭主として祭る者はインドラなのだ」と，状況や儀礼に合わせて説明する。また ŚB では，複数の儀礼において，祭主が祭官（階級）か王族（階級）かによってマントラを使い分けるよう規定している。こうした事実を明確に指摘・整理したのは本論文が初めてであろう。また本論文の独自性は，ブラーフマナの記述だけでなくマントラ自体の理解をも積極的に利用したことにも認められる。例えば，ŚB の冒頭の神話によれば，ブリハスパティやインドラ以来人々は祭式により天界へ昇るばかりであったが，ある時以降地上へ降りて戻るようになったという。そして，それを象徴して戦車の車輪に祭官が登る儀礼においても，ŚB が引用する『ヴァージャサネーイ・サンヒター』のマントラだけは，同様に降りる時のことを想定した内容を伝えていることが指摘されており，マントラとブラーフマナの関係やそれらの編纂史についても重要な視点がもたらされている。

しかし一方で，徹底した慎重な態度が時に論旨を分かり難くし，また個々の議論の明快さに対して全体的な結論が不明瞭になっていることが惜しまれる。また，本論文のテーマにとって重要な先行研究の検討や議論が手薄になっている場合がある。例えば，祭式名である *vājapéya-* という言葉の語義や，祭式の結果得られるとされる *svā́rājya-* や *sā́mrājya-* といった支配権に関わる語彙についても，十分な考察がなされていない。「言葉」とそれを司る祭官（階級）の関わりがしばしば問題になる中，ヴェーダの思想の大きな柱である言葉の持つ力の重要性が説明されていないことも親切とは言い難い。また，学派間の理解の違いがよく整理されているにも関わらず，それらを歴史的な社会構造の推移の中で時間的に捉え直す試みが無いのは残念である。とはいえ，これらの諸点は本論文の価値を些かも損なうものではなく，本論文が従来のヴァージャペーヤ祭の研究を飛躍的に進める研究であることに疑いは無い。以上を総合し，本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。